

知的障害児をもつ母親の養育過程における思いについての考察

－面接調査4事例の結果から－

上越教育大学大学院修士課程 障害児教育専攻

加賀市立山代中学校 中嶋 恵美子

I 研究の意義と目的

ライフストーリー研究をすすめているやまだ(2000)は、これを「日常生活で人びとがライフ(人生, 生活, 生)を生きていく過程, その経験プロセスを物語る行為と, 語られた物語についての研究」と定義している。近年, 障害児をもつ親に関する研究の中でも, ライフストーリー研究の有効性に注目し, 障害児の親の語る内容をデータとし, それぞれの研究視点にそって分析をする研究例が見られるようになってきた。そこで語られる親の経験や思いを受け取る側にとっては, 子どもの成長について, 親が何を思い, 何を求めているのかを組み立てて推測し, 手だてを考えていく際の手がかりとなっていくと思われる。

また, ある親のライフストーリーは, 他の親のものとは当然違っていながら, 他の親の思いを理解する時の材料となって, さまざまな方向から推測できるように導く。事例間での比較やその関連性の中で, 共通な部分に気づいていくこともある。このような研究の積み重ねによって, 一人ひとりの親に見られる個別性と, 障害児の親というものの普遍性の, 両方の視点からとらえていくことができると言えよう。

そこで, 本研究は, 知的障害児をもつ親の語りから, その養育過程におけるさまざまな経験とその時々を思いを分析し, 子と親をとりまく背景要因との関連について考察することを目的とする。

II 研究の方法

1 調査方法

知的障害児をもつ母親4名(A:特殊学級在籍の中学3年の双子の女児の母親, B:通常学級在籍の中学3年男児の母親, C:養護学校中学部3年の女児の母親, D:特殊学級在籍の中学2年女児の母親)を対象に, 筆者が個々に半構造化面接

を行った。調査対象者と筆者はすでに面識があった。面接では, 子どもを授かってから現在に至るまでのいろいろな思いや経験を自由に話してもらった。筆者は毎回その内容を整理し, 次回の調査に臨んだ。

調査は対象者の自宅で, 2005年4月下旬から9月下旬にかけて, Aは4回:総時間7時間59分, Bは4回:9時間4分, Cは3回:7時間54分, Dは4回:11時間7分の面接調査を行った。面接調査の内容は, 対象者の承諾を得てICレコーダーに録音し面接記録とした。

2 分析方法

それぞれの面接記録を逐語録に起こす。分析手順として, 事例ごとに,

- ①逐語記録の中から, 母親の思い, それに関連する事実や経験を語っている部分をすべて取り出す。
- ②取り出した思いや経験の関連性を見ながら, 場面ごとに整理する。

III 結果と考察

1 各事例の結果と考察

1) 事例A

Aさんは子どもに障害があることを知った時のことを,「この子らのペースがあって遅いながらも伸びると信じてきた」と話した。子どもらの障害を冷静に受け止め, ありのままの子どもらを見ていこうとする, Aさんの育児に対する姿勢が伺えた。子どもらが成長していく中で, この姿勢をかわらずに持ち続けられていることが, Aさんの養育態度の土台となっていると思われる。

またAさんは, 面接調査の最後に, 自分自身の人生を振り返り語っている。夫と離婚したが, 結婚したことを「後悔していない」のは「あの子どもらと出会えた」からだと言った。Aさんのこの言葉の中に, 2人の子どもの存在が, Aさんにと

っていかに大きいか、そして、子どもらに障害があるとかないといったことは関係なく、子どもらをそれぞれ一人の人間としていかに尊重しているか、が表れていると感じられる。

2) 事例B

子どもの中学校進学を機に、特殊学級から通常学級に籍をおくことに決めた要因は、「みんなと一緒にしたい」という子どもの意思であった。日常の中で、子どもが友達の中で成長していく姿を見定め、それを実感していたからこそ、学習環境よりも友達との関わりを大事に考えることができ、子どもの希望を受け入れられたのだと思われる。

子どもの「みんなと一緒に」という外向きな気持ちは、校区の野球チームに入るといった学校外の場でも表れる。その際、Bさんは、それまでの「あまり外に出たくない方だった」という自分から、「自分をかえて」いこうとしたことを語っている。地域の中で、子どもとともに成長しようとしたBさんの姿勢が伺える。

3) 事例C

養護学校に進学した子どもは、校区の中学校と居住地校交流をしている。Cさんも「親の会」の活動を通して子どもとともに地域に出て行く中に「周りの人に知ってほしい」という願いがあった。仕事や家事をこなしながら、「親の会」で精力的に活動するCさんには、「子どものために」という思いの強さが養育の支えになっていると思われる。

Cさんは、面接調査の中で「自分の思いなんて」と繰り返していた。それは例えば、居住地校交流の取り組みが、元々は「親の会」の影響が強かったというところにあった。それでも回を重ねるごとに、子どもが集団の中に入っていこうとする姿を見聞きする中で、交流に期待する思いがふくらんでいく様子がCさんから語られていった。

4) 事例D

Dさんは、3人の子育てに追われてきた中で、「今まで目をかけられなかった分、今から時間を取ってあげられる」と、少しずつ気持ちにゆとりができてきたと話した。Dさんの中には、子どもは「指示や声かけがないとできない」という見方

が大きく占めていた。しかし、子どもが地域での職場体験をした後、家で自ら手伝いをする姿を見て、「できる」子どもへとその見方がかわっていった。またこの出来事を話す中で、子どもの行動に対する自分自身の接し方、関わり方について、Dさん自らが気づいていった。

Dさんは、面接調査前半は、話すことで「ストレス解消になる」と、時間を忘れ自分の思いを一気に話していたが、後半になると、自分の考えを整理する場へと、話すことへの姿勢が変化する様子が伺えた。

2 事例間の考察

母親たちの語りにも共通した内容について、次の3点を取り上げ考察した。

1) 子どもの学ぶ場

親たちは、子どもの学ぶ場を選ぶという時、「選ぶことができる」という意識なのか、「選ばなければならない」という意識なのか、どのようにとらえているのだろうか。このような親の意識は、事例によって違っているように感じられる。子どもの状態に応じた学習環境に焦点を当てて、子どももそれを望む姿を親が感じた時、親は安心して「選ぶことができる」という方向に近くなり、比較的スムーズにことが進んでいくように思われる。一方、学習環境とは別の視点で、集団という環境や、地域や他の子どもたちとのつながりを重要視すると、親の苦悩は大きく長くなるようである。個別のまたは小集団という場での、より密接な指導による子どもの成長と、大集団の中で他と交わりながら身につけていくことは、どちらも必要な観点であろう。親にとってはどちらも捨てがたい要因、言ってみれば両極にあるような要因の中で選ぶという時、「選ばなければならない」という意識に近くなるのではないかと思われる。

学校側は、目の前の子どもや親に対して、さあこれからという話し合いの切り出しになりがちのように感じている。子どもの学ぶ場を選んだ経緯についての情報を得ることによって、子どもがこの学校・学級で学ぶことの意義が明確になり、親

が望む子どもの姿について、より理解が深まるのではないかと思われる。

2) いじめの問題から理解へ向けて

事例の中で、子どもがいじめにあつて、母子ともに大変なつらい思いをしたという話があつた。また、直接そのような経験がなくても、親がいじめに対して心配していたという言葉もあつた。

このような問題が繰り返されることは仕方ないのであろうか。世の中が共生という理念をかかげている一方で、学校の中では障害のある子どもたちのいじめの問題が常に起こっている。

学校現場では、障害児・者理解に向けて、交流教育以外にも、道徳教育や人権教育の名のもと、いろいろな教材を使って授業が行われたり、講演会が開かれたりする。それはひとつの手段としてあればいいと思われるが、学校の中の特殊学級の存在、そこで学ぶ子どもたちについて、もっと積極的に取り上げていくことが必要だと感じている。子どもたちにとって一番身近な存在であるはずの特殊学級の子どもたちが、身近にいないのではないかと思われるのである。講演会や教材で、直接知らない人たちの声を聞くだけではなく、すぐ横にいる仲間たちを、自分に一番近い存在として考えていく段階を経ることが大切なのではないかと思われる。

3) 地域とのつながり

4名の母親が語る思いがそれぞれにある中で、地域とのつながりを大切にしていることが共通してあげられた。そして、地域とのつながりを、どのような形に表しているかについては、それぞれの事例で異なっていた。

親たちは、子どもを地域の中に入れていくことで何をねらっているのだろうか。そこには、先に触れたような、子どもを知ってほしいという周囲に対する思いと、活動の場の保障、人と接する、交わることを機会をもつこと、その接し方を学ぶこと、同世代の子どもたちとのふれあい、学校社会以外の場での体験、集団性や社会性の習得、人間関係作り、などといった子どもに求めるものがある。不足しがちな部分を、いろいろな機会を通

して体得させたいという親の思いが伺える。また、「他の子どもたちと同じように」という母親たちの思いもあつた。障害があるから地域とのつながりを大切にしているという思いこみや先入観が筆者の中にあつたように思う。他の多くの子もたちが地域の行事に参加しているのと同じように、障害のある子どももそうしていくことは、決して特別なことではないという視点も同時にもち合わせている必要があると思われる。

学校の教師は、学校だけでなく、家庭生活の様子、地域の中での活動やつながりを同時に見ていくことが、子どものさらなる理解につながっていくのではないかと思われる。

IV 研究を終えて

面接調査は、母親は子育てを振り返り、気づいたり考えたりする機会になっていったようだ。また、十分に時間をかけて自分の思いを声にすることによって、研究協力のためという枠から、伝えたいという積極的な意味を自らもち、語っていく母親の姿も見られた。そして、この研究に関わった母親たちが、他の母親が筆者にどのような話をしたのか興味をもっており、この研究の結果をそれぞれの母親に返していくことが、研究を生かすことのひとつになっていくと思われる。

この研究によって、筆者が親の思いを理解したかというと到底そこには行き着かない。今はまだ、親の思いに触れたという段階であろう。それでも他の親と話をする時に本事例が参考になったり、親の思いを現場教師と考える時に不可欠な資料となってくる。このように他者と共有して初めて、親の思いに触れた段階から理解する段階へと進むものだと思っている。今回得られた内容を反芻し、また他の事例と重ね合わせる作業をすることに意味があり、今後の教育活動における貴重な財産になっていくものと思われる。

文献

- 能智正博 (1999) 障害者における自己の捉え直しとしてのライフストーリー. 発達, 20(79), 49-57.
やまだようこ (2000) 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か?—. 教育心理学年報, 39, 146-161.